

837

10

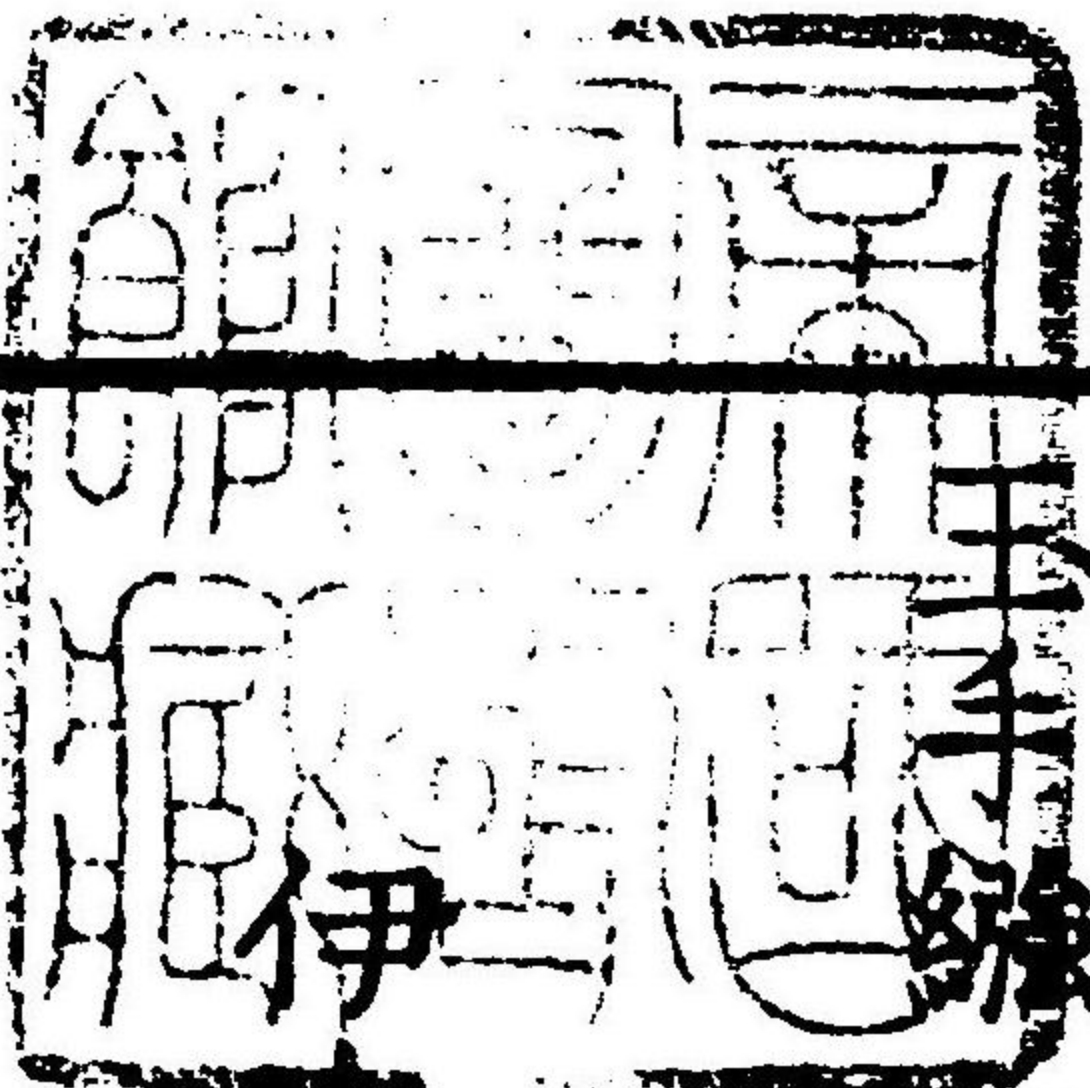
86

多滿太須幾

七

曹山文庫

玉手鑑七之卷



伊吹能屋先生講本

人門

出羽國 細矢庸雄

下總國 山口忠榮

出羽國 佐木胤英



○次は別小手拔拍ち。右此如く拜みて。

七十

辭別氏津速産靈神。市千魂命興台産靈命。天兒屋根命。亦
名八意思兼神。亦名太詔戸命。亦名擲眞智命。乃御前乎慎
美敬比。思慮乃智有志米言美志久。吾爲業乎。彌進爾進給
比。幸幣給閉登畏美畏美毛拜美奉留。

天兒屋根命。八意思兼神を別神と爲之依を。古書此誤ある

おまほは、此神を津速産霊神の御子。市千魂命は御子。興台
産霊命の御子。小坐以事ふと。古史傳小委曲を説く如
し。第六十段の傳り、委くして天兒屋命、亦名八意思兼神の
功績は、おとは、第四詞に説く如く、まゝ人もよく知れる
事ふまは、此を畧して、其御名は義を説くむ。は、お思兼と
は、師説の如く思慮して、數人の思慮る智を、一人の心を兼
持る意ふ。八意と申は、彌心は義して同じ。まゝ兒屋根
と申は、兒屋は、八意を反さま小稱せよ。心彌は義あり、
師説よ、此神太詔戸白して、大御神を招奉り給ひし故に、招
祖てふ名を負て、招の乎を畧き、伎於茂切めて古といふ。祖
を玉祖と同意あり、と有れど、然らば、まゝと旧説し、其はま
兒屋てふ字に就て、鞅るおまは、云ふも足らば、

古言小心を許くも、許呂と母許理も、紀理とも、許く理
をも云ひて、疑と同言れるが、語の本は許して、其許を云ふ
一言を、やがて疑る義何ぞ、是を以て兒屋とは、彌心を反さ
は、小稱せよ、共小御意は思慮の弥足ひませる由は
御名ぬる事を辨ふ。上よ、挙る詞どもの例あり、此も
も非ざれば、大意を記し、其委き説を、古史第六十段に傳り、就て見る。は、亦、名を太詔戸
命と申は、由を、かの石屋戸段、廣き厚に稱辭を白し給
ふ、故に、かく申し、擲真智命とも申は、擲を擲石意命、
稲田姫命、おまは、久志と同く、例の奇なる由は、稱名、真智を
麻邇と同言ふて、此神、鹿の肩骨茂灼きて占ふ、太兆のわざ

を始免給へりし故の御名あり。是をもて後までも。太兆の
ト事^{ウラフガ}執行^{トリオコ}を志免給ふ時を。必^{カナラ}此神を迎^{ムカ}ふる祭^{マツル}を給ふ
御例あり。委^{オモシ}しくは古史傳^{コシデン}に於て此神の御父神^{ミコノミ}を興台^{キョウダイ}産靈神^{ウツミタマノカミ}
と申^{イハ}ひ。御名^{ミナ}此義^{コト}ハ。御子^{ミコ}兒屋根^{コノヤネ}命^{ノミ}乃功績^{イササキ}よ^リ延^{ヒキ}て考^{カガ}ふる
小^コ興台^{キョウダイ}は本^{ホン}よ^リ借^{カリ}字^ジ小^コて心利^{ココロト}の義^{コト}あり。其^{ソノ}は万葉^{マンヤク}小^コ山^{ヤマ}菅^{スガ}
此止^{ヤミ}て公^{キミ}を念^{オモ}ふるも吾^{ワガ}心神^{ココロノカミ}此頃^{コノトキ}を那^ナき。は^ハ吾^{ワガ}情利^{ココロト}
の生^{イナリ}也^{ナリ}も那^ナき。は^ハ吾^{ワガ}情度^{ココロド}乃^ノ和^なる日^ヒもれし。あ^ハと數^スある
情利^{ココロト}これあり。情度^{ココロド}と加^カふる度^ドを假^カ字^ジあり。此^{コノ}了^リて心^{ココロ}神^{カミ}情^{ナリ}
神^{カミ}と書^カふるハ義^{コト}訓^{ナリ}情利^{ココロト}と書^カふる。其^{ソノ}はあ^ハ万葉^{マンヤク}小^コ極^{キョク}太^{タイ}甚^シ利^リ
る也^{ナリ}。正^{マサ}字^ジあることを辨^{ワカ}ふべし。其^{ソノ}はあ^ハ万葉^{マンヤク}小^コ極^{キョク}太^{タイ}甚^シ利^リ
心^{ココロ}云^フく。は^ハ燒^{ヤキ}太^{タイ}刀^{タガ}此^{コノ}刀^{タガ}其^{ソノ}己^ミ呂^ロも有^アれむ。那^ナと詠^{イハ}る利^リ心^{ココロ}了^リ

て。十二卷^{ジュニマキ}小丈夫^{コサツヲ}也^{ナリ}。聰神^{サトキミ}も云^フく。也^{ナリ}有^アる聰神^{サトキミ}小^コねれし。キ^キ神^{カミ}
とは真^{マコト}利^リき心^{ココロ}。然^{シカ}れむ利^リ心^{ココロ}。心^{ココロ}利^リあ^ハ反^{カヘ}さほみ云^フる此^{コノ}みあ
也^{ナリ}云^フふ語^{コト}あり。然^{シカ}れむ利^リ心^{ココロ}。心^{ココロ}利^リあ^ハ反^{カヘ}さほみ云^フる此^{コノ}みあ
そ有^アれ。弥^ヤ心^{ココロ}。心^{ココロ}弥^ヤの反^{カヘ}さほみ云^フる此^{コノ}みあ
心^{ココロ}真^{マコト}利^リく。弥^ヤ足^{タラ}ひ坐^マる由^ユの御名^{ミナ}也^{ナリ}。許^{コト}を清^{スミ}ても濁^ヌりて
心^{ココロ}を凝^コと同^ト言^フあるを。万^{マン}葉^{ヤク}小^コ凝^コ敷^シ道^{ミチ}あ^ハ濁^ヌりて云^フひ。今^{イマ}世^セ
小^コも膏^コれ也^{ナリ}の硬^コれ依^ヨる。コ^コハルともコ^コハルとも云^フをり。
は^ハ許^{コト}る呂^ロとは凝^コる義^{コト}也^{ナリ}。小^コ就^{ツキ}て吾^{ワガ}意^イふて。心^{ココロ}云^フ物^{モノ}の。
聖^{ホシ}妙^{ミタカ}本^{ホン}依^ヨ趣^ソを思^{オモ}ふ。古^コ史^シ發^{ハツ}辭^ジ子^シ村^{ムラ}肝^{キミ}此^{コノ}心^{ココロ}云^フ依^ヨる。加^カ茂^モ
翁^{オウ}説^{セツ}了^リ。群^{ムラ}が物^{モノ}と云^フ加^カ里^リ此^{コノ}反^{カヘ}紀^キ也^{ナリ}。ば。群^{ムラ}き物^{モノ}と云^フ依^ヨ
小^コて。物^{モノ}の多^タ也^{ナリ}。事^{コト}を許^{コト}る良^ラ許^{コト}る婆^バ久^クれと云^フ是^{コノ}は。群^{ムラ}が物^{モノ}
あ^ハら也^{ナリ}言^フ掛^ケしれらむ。也^{ナリ}言^フれしは然^{シカ}る言^フて。此^{コノ}を即^ス群^{ムラ}

靈神也。此思ひの靈妙ある功德を持給るが故に。産靈
てふ御名をも負坐依事と知られとて。その高皇產靈神皇
玉積產靈火產靈稚產靈れど申に。產靈の意を思ふべし。書
紀に。此神字何と思われむ。一書に。一。所名字出されとま
ど。神とも命とも記さむ。興台產靈と此み書れしハ。甚じ
き非あり。故に私に神字を補へり。其由ハ古史傳に論ふを
見る。然る小此神の思慮の智はし。依事蹟の見えざ依
は。御子兒屋根命亦名思兼命。小至とて。其神徳の顯はる。幽
死所由何よし由依べし。其在稚產靈神此御徳乃其御子
ある例をも。然るは言を心神の緒を辨へ述る。大切の物
思合まへし。然るは言を心神の緒を辨へ述る。大切の物
て。此を善志く云得ては思慮に徳用を成こせ能を成
まば。心言とよく相應を有けららぬ態依り。兒屋根命

其を兼て。御心の八意あるハ更小も云之。其言善志く。彼石
屋戸段に太詔戸言よく白し給り依り。天照大御神まゐし
召て。若此言に麗美ハ有らば。と詔へるを思ふ。万葉の歌
れぞ小言靈と依依を。寓の言ぐは。非交て。即そ此御父。
興台產靈神の事あらむと所思る也。但し藤原系因了は。
りて。己く登を許登と切れ。此を上よ云。ごとく。心利の義。
言靈の言ハ正字にて。言ハ幸はふ。其の義も。互に異あり。
かくて言てふ語の義ハ。心音あらむと。覺也れむ。心利を
びと申に。御名とを義替むと。言語の本。まよ此神の神徳
と。必然も有べき事。小こそ。其は万葉五卷の長歌小。神代
よと云傳らる。虚見津倭國を皇神の嚴志き國言靈也。幸
ふ國と語り。繼ぎ云。繼ひらと云。十三卷小。志貴嶋の倭國

は事靈比佐くる國を眞福在よく。れと詠免了。おは異國へ
往く人を祓
こる哥あり。言灵と書るハ正字。此ら此歌ども。本書の全歌
事を灵とらける事ハ借字あり。をなく見るばし。倭國を言靈神の佐け幸はふよ依て。言語
をなく見るばし。倭國を言靈神の佐け幸はふよ依て。言語
此麗き國ある故不。其美死詞をもて。壽言をれば壽ぐはよ
は小。天地の諸神比感坐て。福へ給ふ由を詠了。おま万葉
小も仁明
天皇紀よも言灵をよ免る哥あれど。所狭れむ引出せ。古史傳小就て見べし。はて天兒屋命の然
しも太詔詞をく白し給へるは。興台産靈神。それ時しも。殊
尔御靈を幸す坐し故る依こそ知るばし。然きバ古道を學
びて。心利あらむ事を思ひ。言我も善からむと思はむ了は。
此神の御靈をよせ小祈願奉るばき事小こそ。此神の利心
と詔語とよ

幸へ給ふ事ハ何れの國も同じ御惠こそ蒙れども。御國を
神國ある故不。言語比道殊よ正しく傳はりて。活用まよ比
類なく。遷しき國あるを別て古語おも言灵の祐くる國と
を云繼しあ言灵と云字。実小神在ルりとは得尋神を徒
小寓言のごとく解する説のみ聞ゆるハ。是まで興台産灵
神の事迹を考する人れ一人も無りし故あり。産灵とさ
牙称せる我小縁あらぬ御名としも。心著ざりしを何ぞや。
景行天皇の大御詔不。大倭國者。以行事。負名。國也。と詔する
如く。神比功德を譬へ其事迹の傳むらざるも。御名をうす
さひ考へて。その御行事を探ぬること。是ぞ古学の專要あ
り。儲まよ後あがら大鏡小。醍醐天皇比皇子比生坐る。五
十日此餅を。殿上小て出させ給する時小。維衡中將。二年小
今宵加ぞふ依今よ了は。百年まで此月加げを見む。と壽白
せる小。天皇の御製小。祝ひある言靈れらむ百年比。のちも
盡せぬ月をこそ見免。堀川百首小。俊頼朝臣。言靈乃れおが

一の無ナさ小コ茂モらみミ比ヒと。梢コサれレがガらラもモ年ネをヲ越コえエ哉カ。おオどドおオ有ユ。
了。此、俊頼朝臣の哥を。久保能を依と云ふ物子。今、俗了節
は、谷タニをモてテ木キ此コ木キ小コ至シり。其、樹ツ小コ向ムカひヒてテ來キ年ネよク案アる
や。案アれレらラ來キ年ネよク案ア生シるルとト云イふフ。樹ツ上ノ人ニ生シまス。あハやウとト答コふフ。かク
まレれレをモ來キ年ネよク案ア生シるルとト云イふフ。是、言コト靈レイのノ眞マコト福フクくク在アりリ。
然シまシババ古コ小コもモ然シるル。己ミがガ民タチ間マ小コ有ユしシ故コト。梢コサれレがガらラ小コ年ネをヲ越コ
とト詠イれレしシ。やヤをヲかカみミまスとトはハ。拜イハひヒとト云イふフ。やヤ。此、朝臣テウシのノかカ
あハるル事コトをヲとト出デてテ上ノ手ノのノ口ノ小コ任ニせセてテ。詠イれレこノるル哥カ少シらラ
まレ。然シれレをモ近チカ俗ソクのノまスるル所トコロもモ古コ。代タテ遺ヰ風フウ。あハかクてテ上ノ代タテ了レはハ。此、
言コト靈レイ此コ幸サキはハふフ謂イハれレあハぬヌがガ故コト。物モノをヲ造ツクりリ事コトをヲ行ユふフ。祝イハ言コトしシ
おオ、物モノせセるルこトもモ多タかカりリ。そノはハ神功皇后ニギハヤヒのノ酒サカ賀カ比ヒ御ミ歌カ小コ。此、
御ミ酒サカをヲ我ワがガ御ミ酒サカあハらラにニ。久ク斯スのノ神カミ常トコヨ世ヨ了レ在アりリ石イハ立タにニ。少ス御ミ
神カミのノ神カミ祝イハれレ狂キヤウ布フしシ。豐トヨ祝イハれレ廻マりリ奉オウじジ來キしシ御ミ酒サカをヲ。とト詠イまスしシ。

建内宿禰の御和ま茂せる歌小。此、御酒を醸乃む人は云く。

歌ひお、醸乃れらも舞お、醸けきらも。此、御酒の御酒比

阿夜小うあ、熱し。と詠れし故事。卷元年の処不出り是

よてい小し。酒を醸たる小。哥ひ舞ひ祝お、造れるはと

あ。と知られよゆ。今も然るること。人も知れるが如し。はと

神樂歌小。杖を皇神の御山比杖。山人比。千歳を禱り切れ

る御杖ぞ。れど有茂も思ひ合をばし。其と言美しく祝ふ詞

小は善神の吉事を幸。凶く志た詞りハ。善神の感給を孫

む。枉神比所得て凶事をも引出れを。故古は更あゆ。今、

世小も。事茂成さむと爲るふは。ま於壽詞を專とける事れ

了。其古を云は。大殿祭酒。賀室壽を始。壽詞をること。數

を謠ひ難して。物ある事の多う依て古風の遺れるあり。然
事を常云ふ言語も心を擧げて凶くしき言を心奪べき
事よこそ其神世より詛言小驗ある事ハ更にも云は
純古も人を祝ぐ哥小所思え凶くしき詞をみ合せて
殃災の出來し例も少うらば擧じてかゝる事ハ俗の生
さかしき倫をそハ然る禍事の出來る端小也くりなく詠
應へたる物ぞれども事もあげよ云ふも有れども然る古意
を知らむ人たちも有らむ有れども古意を探るむ人ハ
随分な心を著べき事あり。然ハ何れも世に御幣をむ人ハ
て自己を更あり。家内の者等よさへ制を立て死四ふとの
字を云ふ所為あり。古くも反語とて葦をヨびと云ひ梨
起る愚人の所為あり。古くも反語とて葦をヨびと云ひ梨
案をアリノ三と云ふ類まゝ神宮の忌詞れどの類も有れ
ど此を殊み旨ある事小て然る痴がましき事小ハ非也。此
ら字除て古き博士とちの日本紀を讀奉れる御讀と
て思選ぶ。讀さ依語の多うさす小然しも甘心せる事を
は覚えぬ。此は序あるを。儲かく思ひ集免。立加買了。其
御祖神とちれ事を説くむ小津速産靈神も古語拾遺の異

本小。高皇産靈神。皇産靈神と共小。天也御中主神の御子
と有れど。此を後人の思ふ旨あるが。擧入せる妄説ある
也。既小委く辨へるが如し。古史第六十段。然らば此神
此出自は誰神よと云む。此を疑なく火産靈神也。其
由を津速とは伊都速の伊を畧記言依小て。伊知速の伊を
畧記て。千早也云ふも同ぐれむ。御名の義ハ伊都速き方小
卓れ坐る由也。伊都速の伊れ畧るる例。まゝ伊都速也。伊
也。以来人の普。天上に坐り神等此中小。然る伊都速き神
は。火神を於きて誰神と有らむ。其は此神を祭る詞小。御心
一速比給波志止爲云く。也有をも思ふ。此神伊邪那

岐大神小斬られ給し小其御體ハ天上ニ騰じて香山と化
れると。玉眞柱も云る如くあれむ其御靈やがて彼山
小坐まして市千魂命ハ其御靈比御子小坐候と聞えとり。
其古史神武天皇卷ニ載せる此神の御靈火雷神の丹塗
矢ニ化りて建角見命の小女王依毘賣を孕せて鴨若雷命
を生し免給へる故此命の名もは親神の御名と同義
なり其市は伊知速の伊知小て伊都と云小同く千は比
古遲の遲と同く男神比稱名亦依りて知候し。猶言は津速
魂命男武乳速命といふ有り是ま乳速を伊知速の氏録津速
伊を畧き武を冠て稱へたる名なるをも思合はべし。而
津速産靈神市千魂命興台産靈命と次く小火産靈比功業
成て兒屋根命小至りて思慮比智全く備ひて石屋戸

隱の大禍事直し給へる功績の高く比類なれこと幽き
因る事ふか。ま此兒屋命ハ火産靈神の御末と
所由を矢く所知看ねて此時の禍事を直さむ事謀をべき
へる皇産靈神の御量ハはと殊りゆしき御事也。其
其た加比招事小用ふる物を悉く香山よ取れる所以を。
ま於熟思ふ候し抑火産靈神を第廿一詞小も云依如く其
御母の己命を生給へ依りて豫美都國ニ神退ま
し其事小よりて己命を斬られ給りて是を以て其御靈比
彼國を甚く悪みて彼處小屬する事物多ハ悪し坐して疾
く却ひ失比てむと稜威速比給ふ御靈比盛なる故小その
御靈小頼り多彼罪穢の大禍事を却ひ失をむと思慮りて。

加比御骸の化れる香山よ。招事小用ふる種くを取れる
小を有る。かくて此香山を後には大和国小天降し給へ
天神の御教し坐て其香山より埴を取りて嚴籠を作りそ
を用ひて神を祭り給は。虜ども平伏あむと御勅あてし
らば其神勅のまじく物し給ひて虜を込おし。於其神
事小用ふる火を嚴具と号け給へるれど悉く石屋戸
段の故事小よりて火神の御冥徳を仰ぎ給ふる御所為
ることハ更よも云に後世までも神事小火を清むる事
嚴あるは清き火の徳よりて禍を拂ひ。於穢有りて
枉津日神まじ御怒り坐て禍の起る故あり。然れバ世
清むべき物。火を燃りく事あり。其御冥子よゆて清
め事と為る。古の意小叶へり。凡て穢ありてを誰神も
こを惡ひ給ふ中。枉津日神火産灵神共。穢を惡ひ給
ふ故。其事物小幸ひ給ハぬ時を伺ひて一向。枉事を為
さむ。好む妖神とちの荒。然る因縁をし思ひ慮りて知給
ひ立。於道理を有る。加の神比御裔ふる小熟く符へ。奇異
牙。兒屋命。此。加の神比御裔ふる小熟く符へ。奇異

は。況て其思慮め給へ。太北の事はしも。神の御心を問
奉る。よれき重た神事ふる。其事小鹿比肩骨子灼てト
合は。こをを始給へる。こを殊可畏し。其を獸比多う。中
よ。此獸ハし。火神の御體よ成ませる。大山祇神の御裔小て
其使者を。此事を第五詞小もあら。云。肩小奇靈
骨。何て。其子波。迦もて灼とた。無上至尊。大御神の
御心を。牙小窺ひ奉る。ほき事の由を。辨へ。智り坐るは。此
神の奇靈れる。智の中。小最妙ふる。思慮ふる。斯て其功績
命と云ふ。御名を。牙。負坐し。その御裔の次。其業を仕
奉れる。こと。古史第六十段の傳。委く注せる。如し。神名
式。大和国。十市郡。小天香山坐。擲真知命神社。大月次。新嘗
元名。大麻等。乃知神とある。ハ。上。云。る。如く。香山ハもと。天

俗小憑物の為るれと言ふ物も、も、さ、お、同、じ、意、あ、り、を、知、べ、し、此を神と云ふり同く弘く云、依、語、の、る、を、以、て、物、知、人、と、云、ふ、は、神、祇、の、情、態、に、幽、り、て、著明うらぬ字、知、辨、ふ、る、由、に、稱、あ、る、事、を、曉、る、法、し、然れを知、と、云、ふ語の本も、漢、文、も、著、明、炳、焉、明、白、分、明、灼、然、あ、ど、書、る、を、志、留斯とも、伊、知、志、留、斯、と、も、訓、む、志、留、と、同、く、幽、れ、と、依、事、字、著く、其、由、の、言、小、て、白、も、同、言、あ、る、が、此、を、も、太、非、事、字、行ひて、其、火、折、此、非、小、より、て、幽、事、を、知、り、出、さ、る、言、あ、る、べし、伊、知、士、留、斯、の、伊、知、は、伊、知、速、の、伊、知、小、て、此、を、伊、知、速、く、灼、き、由、小、て、後、に、加、れ、る、言、あ、る、べ、く、ま、と、印、驗、祥、あ、ど、の、字を、シ、ル、シ、と、訓も、同、言、あ、り、加、く、思、ひ、續、く、依、小、中、昔、れ、書、等、小、も、此、知、を、云、依、を、大、う、と、漢、籍、物、語、書、あ、ど、よ、み、説、て、世、の、目、に、見、る、依、少事イ、サ、ケ、トを知れる倫タ、カ、ヒを云ひ、今、世、小、も、然、る、倫、を、さ、し、て、物、識、人、と云れるは、甚、く、故、實、小、違、へ、る、語、あ、り、況、て、謂、由、依、儒、者、あ、

ぞ、我、物、知、と、云、む、事、は、殊、に、甘、心、せ、ら、る、稱、す、て、已、が、心、を、是、を物識モノ、シ、リあらむ所、思、も、る、人、は、未、得、見、ぞ、有、ら、依、今、世の已、が、見、聞よ、及、べ、る、大、人、兒、の、学、者、さ、ち、あ、ひ、て、は、事、識、あ、ど、は、称、借ひ、も、ま、げ、し、物、知、と、云、む、返、を、く、當、ら、ば、と、知、べ、し、天兒屋根命示、名、八、意、はしも、右、小、云、こ、ぞ、如、神、德、の、神、小、坐、せば、古、道、の、真、に、學、問、せ、む、人、を、更、あ、何、業、小、ま、れ、某、く、小、思慮オ、モ、ヒ、ハ、カで、ハ、タ、ラ、キ文智ハ、タ、ラ、キあくる、得、有、ら、ぬ、事、小、し、有、ま、バ、其、本、於、御、祖津速産靈神オ、ヤ、ツ、ハ、ヤ、ム、ス、ヒ、ノよ、始、免、て、常、小、拜、み、奉、り、て、言、語、の、道、を、も、美カ、ク、らむと願オ、ネ、ギ、ミ、ラ白さば、ハ、有、ら、ら、交、を、所、思、也、依、此、を、よく神習カ、ク、ひ努ツ、トむるを、成、人、の、學、と、は、云、あ、り、漢、籍、説、苑、と、云、物、よ、理通、乎、物、類、也、変知、幽明、也、故賭、遊、氣、也、源若、此、可、謂、成、人、矣、既知、天、道、而、加、レ、也、以仁、義、礼、樂、成、人、也、行也、若、乃、窮、神、知、化、德、

史盛也と有り。亦古史第六十段の傳小委く云ひ。まゝ此書第廿四詞の下小云るをも合せ考ふべし。

○次小は別子手を拍ち。右此如く拜みて。

辭別氏。天宇受賣命。亦名大宮能賣神。亦名宮比神。亦名矢
也。箒神乃御前乎慎美敬比。某我常尔仕奉留神等乃御心。
君親乃心尔令違受乎。躑足躑令爲受家内乃者等。己我乘
乖令在受朋友親族他諸人乎。母睦比集幣吾爲業乎。彌進
爾進給比氏。惠良惠良尔笑比。賑波布家斗令在夜守日守
耳宮比乃御靈乎。幸幣賜閉登鹿自物。膝折伏世。鷓自物頂
根突拔氏。畏美畏美毛拜美奉流。

天宇受賣命の亦名を。大宮能賣神。宮比神。矢也。箒神とも申

八十

して。此を皇產靈神の御子。天太玉命の子小坐ち。委くは
五十七段の傳より。此神の有功れま。第四詞の處小も
云るを見べし。此神の有功れま。第四詞の處小も
説と依如く。天照大御神を。天石屋戸よと招出し奉らむと。
諸神あち。始免て神樂を奏し給ひし時小。此神それ神遊び
の長と志て。天日蔭を髪とれし。天真拵を手次よりけ。天小
竹葉茂手草小結て。手小鐸を付とる。茅纏の矛茂もちて。神
憑せる如く。胸乳まゝ股字さす。小攪頭をし。裳緒をバ陰了
たし垂れ。汗氣槽ふせて。踏響かし。比登布多美余。伊都牟由
那く夜許く能多理。毛く智余呂都といひて。舞謠ひ。巧了俳
優し給へまば。其場小集へ依八百方神とち。高天原の動む

ばのて小笑ひ給ふ。宇受賣命の神憑せる状了。おざと物狂
をかく笑はし免て。大御神を怪ませ奉らむ。あゝ小天照大
御神果して其を怪み思ふし。天兒屋根命此稱辭をも感由
して。石戸我細目小あけて。御覽し給ふ時よ。かの戸側小隠
立ゑし。天手力男命。それ御手をとて。引出し奉れるこ
也。第四詞よ説るが如し。はて此時の俳優をれち神樂
は濫觴あゆが。ま於和邪表伎と云ふ語は。和邪ハ童謡
諺物のおざれと云ふ和邪小て。表伎を袁加斯の約れるふ
了。其は物に憑て狂をける態の如く。胸乳股などかき出し。
いと可笑く物せ依故此名あて。師此表伎をも招の意
小解れとまど似とる言

あがら然らぬ。其此段の俳優こそ。招と志て通ちれども。
是より遙後。火須勢理命。火く出見命。伏ひて汝命の
俳優者と為らむと云て。潮に溺れし時の状を擬ひて。種
の狂態し給ふるハ。其御心を執直さむと此態あるが。此を
も和邪表伎と云へり。此表伎を招と志て。叶ハさ依。表
加斯の約りを見れむ。何処にも能く叶ふこと。心を平小し
て思ふ。神樂とかきて。加具良と訓む。神惠良伎てふ語の
約れるふて。惠良具とは。咲榮え笑ひ樂むを云ふ。加茂翁此
神樂と云を。古言ならむと云れとまど。はて内侍所の御神
然らば。季くは古史傳よ就て見べし。はて内侍所の御神
樂ハ更あて。神樂と云ふハ。神の御前小て行ふ。遊態此名と
爲れるが。最古くは。石屋戸段此因縁よよて。其歌舞とも
小可笑し。此事我主と志て。樂器の調子も。それ歌舞小從
て。某調と云ふ定免ハ無てしを。後よ漸く小古風を改免て。

ふ其名哉負^カ流ハ彼も佐流^サガふ性の物^セあれむ^レ也。其^キを漢籍^{カンキヤク}子^シ俳優^{ハイウ}の字^ジを雜戲^{ザキ}如^ニ狝猴^{センコウ}之^シ狀^{シヤウ}。其^キは舊^コき物語^{モノガタリ}書^{シヨ}ども小^コ佐流^{サルーガ}賀^ガ布^フ和^ワ邪^{ジャ}。まゝ佐流^{サルーガ}賀^ガ布^フ賀^ガ麻^マ斯^シふと有^ル是^レふ^カ流^ガ。此^コをばと佐禮^{サレ}とも云^フへ^ド。其^キも諸書^{シヨ}小^コ佐禮^{サレ}婆^ハ美^ミ佐禮^{サレ}毛^モ乃^ノふと有^ル是^レふ^カ。ふ本^ホ佐禮^{サレ}てふ詞^シの例^{レイ}を^トげむ。長明^{チヤウメイ}無名抄^{ムナナシノサヒ}小^コ俳諧^{ハイキヤウ}頼^{ラン}云^フ。俳諧^{ハイキヤウ}哥^カの事^{コト}世^セ知^チれる者^{モノ}ふし。けまこと哥^カと云^フべし。能^ネくもれ云^フ。人^{ヒト}のさきふ^カ流^ガ。が如^ニしと有^ル。然^シれむ。佐流^{サルーガ}佐禮^{サレ}同語^{ドウゴ}了^リて。戲^キれ^ルの義^ギある^ガ。今^{イマ}世^セふ^カやれと云^フ語^ゴを疑^{ウタガハ}ふ^カ。此^{コノ}語^ゴの存^{ゾン}れる^カ。源平盛衰^{ゲンヘイセイサイ}記^キ。猿樂^{サルガク}と申^{マウ}は。哉^カる^カ志^シき事^{コト}を云^フ。お^カけて。人^{ヒト}を笑^{ワラ}は^ス。し侍^{ハベ}る^カぞかし。言^イひ。新猿樂^{シンサルガク}記^キ。小種^{コタネ}。これ戲舞^{キマシ}の名^ナ哉^カ出^デして。都^{ミヤコ}猿樂^{サルガク}之^シ態^{タイ}嗚呼^{ウフ}史^シ詞^シ也^{ナリ}。と有^ル

流^{リウ}を思^シふ^カ。屋代翁^{ヤシロウ}の猿樂^{サルガク}考^{コウ}。古^コは謂^{イハ}ゆる俳優^{ハイウ}ま^カ猿樂^{サルガク}と云^フ。しは。音樂^{オンガク}と舞曲^{マシク}と具^{ツク}は^スれる事^{コト}ふ^カ。非^ヒな。一時^{イツジ}の戲^キ小^コて。俗^{ソク}小爾波^{コニハ}加^カ。と云^フ。事^{コト}の如^ニく。今^{イマ}行^{ユク}を流^{リウ}猿樂^{サルガク}。相^{アイ}狂^{キヤウ}言^{ゴン}。と云^フ。ふ物^{モノ}。それ流^{リウ}ふ^カ。流^{リウ}べしと有^ル。は。實^{ジツ}然^ニる^カ。説^{セツ}ふ^カ。有^ル。は。流^{リウ}。ふ本^ホ今^{イマ}行^{ユク}。は。流^{リウ}。四座^{シザ}の猿樂^{サルガク}といふ舞^{マシ}ハ。名^ナをこ^コ。猿樂^{サルガク}と云^フ。へ。上^{ウヘ}。不^フ論^{ロン}。へ^ル。古^コ。猿樂^{サルガク}と云^フ。元^{ゲン}より別^{ワケ}了^リて。應永^{オウエイ}の頃^{キョウ}。足利^{タシキ}義滿^{ギマン}將軍^{サマ}の時^{トキ}。小權輿^{コケンイ}せる事^{コト}ふ^カ。其^キ。猿樂^{サルガク}考^{コウ}。子^シ委^ヰく論^{ロン}。は。れ^ル。と^ス。る^カ。見^ミる^カ。べし。は。天^{テン}。宇^ウ。受^{ウケ}。賣^{ウレ}。命^{メイ}の俳優^{ハイウ}し給^{タマ}ふ^カ。時^{トキ}。小^コ。亦^{オホ}もて汗^{アセ}氣^キ槽^{サウ}を衝^{ツク}と^ス。ろ^カ。加^カ。し。比^ヒ。登^{トウ}。布^フ。多^タ。美^ミ。用^{ヨウ}。云^フ。こ^コと唱^{ナゲ}ふ^カ。し。ハ。六^{ロク}言^{ゴン}。四^シ句^ク。は。戲^キ。歌^カ。ふ^カ。流^{リウ}。を。本^ホ。こ^コ。ま^マ。奇^キ。小^コ。妙^{テウ}。あ^ア。る^カ。尊^{ソウ}。き^キ。由^ユ。あ^ア。流^{リウ}。歌^カ。あ^ア。る^カ。故^{コト}。了^リ。此^{コノ}。を。天^{テン}。小^コ。て。數^{スウ}。名^{メイ}。と。め^メ。し。給^{タマ}。へ。流^{リウ}。が。後^{ノチ}。は。饒^{ニギハヤヒ}。速^{ハヤヒ}。日^ヒ。命^{メイ}。は。天^{テン}。皇^{スミ}。祖^ソ。神^{カミ}の十^{ジュウ}種^{シュウ}。は。神^{カミ}。寶^{ホウ}。を。授^{タマ}。ひ

て降し給ふ時了。若痛所あらば。此十種を合せて。一、二、三、四、
五六七、八、九、十と云ひて振牙。由く良くも振へ。然しては死
人も生返らむを教導し給ひしは。鎮魂祭の本なる依を。其御
祭。小宇受賣命。此裔之依。御巫猿女君ら。それ事を掌て。宇
氣槽の上小立て。梓もて其槽字於く敷を。十種寶の敷合
せて。一よ。二十まで。聲高く唱ふることは。石屋戸段。此故事
小よ依事。其は古語拾遺。鎮魂之儀者。天鈿女命。之遺
跡也とあるを以て知れし。天都神の御言よ。此を誦らむ
小は。死人も生返らむと詔するを。畏と尊みて。等閑小思ひ
奉るは。じ死事れ也。鎮魂祭。此段。此儀を用ら。依、事。大
御神のさし。遊り坐る。或招奉りし意は

牙を以て。遊散する魂を。招き鎮むる意あり。その神政令。義
解。鎮魂言。招離遊之運魂。鎮身軀。中府故。曰鎮魂とある
を以て知べし。猶この御祭。此深き故よし。ハ。中。此
其大意を。小云。得。今も少。其端を云ふ
也。委くハ古史。神武天皇。卷の
傳。云ふを見て知るべし。此て石屋戸段の事。よ。遙後
小。天照大御神の詔命。小依て。皇美麻邇。命を天降し
給ふ時。五部緒神。此中。此神をも。副ふ。以。皇美麻。命を
て。天降。まさむ。と爲給ふ時。も先驅者。り。天八
衢。小。背。此。長。七尺餘。の神居。て。上。は。高天原。を。光し。下。を
葦原。中國。を。て。らし。眼。を。八咫鏡。の。如し。と。白。け。御。供。の。神
等を遣して。問。お。給。ふ。面。を。む。け。難。う。了。し。ら。ば。宇。受。賣。
命。小。汝。を。手。弱。女。な。れ。ど。も。射。對。ふ。神。に。面。勝。於。神。な。ま。ば。往

て問ふと詔ふ了。宇受賣命往向ひて怖れけも無く問し
ゆ。其神答て。吾ハ國神名を獲田毘古神也。天神此御
子の天降坐に也聞於る故。啓行奉らむと待向ひ侍ふと
白し給ふ。さく小宇受賣命。その天降坐べき處を何處よけ
むと云こ坐まで。具よ問ひて還り參て。其由を白し給
ふ。皇美麻命。去れち獲田毘古大神を御前小立て。天降坐
り了。猶委く古史傳。古語拾遺。小天鈿女命を天乃於須女
とも申由を記して。其神強悍猛固故。以爲名。今俗強女謂
也。於須志此縁也とありて。石屋戸段よかの俳優し給へる
趣を更あり。獲田彦神と問答し給へる趣あど。凡て強悍猛

固ある故。宇受賣てふ名を得る由あり。宇受於須。同言
借字あり。俗よねまし。おをぬしあど云ふ。おを。此神は
ねまは武き義。宇受賣命の宇受も同じ。此神は
亦名を大宮能賣命と申由。古語拾遺。天照大御神を
かの石屋よと出し參らせて後。既了造り設けとて。新
宮小移し坐志免奉了。天手力男神。亦名。天石戸別命。それ御
門を守護まし。此由より。此神をまよ。豊石窓。櫛石窓。命
也。大御神の宮は御門。まよ。天皇命の御門を守護。まよ。由
此号あり。然るを俗の神道者流。あど。此神号を書ぶる札を。
凡人の門戸小張し。むるが多し。ゆを辨へざる。みより
所為れ。凡人の門戸を守り給はむ事を祈る。よハ。第十六
詞。云。由緒あり。大宮能賣命。それ御前小侍ひて。大御
塞神こそ宜し。大宮能賣命。それ御前小侍ひて。大御
心執て。そ仕奉り給へりける。天手力男神。やがて天石

門別命小ゆし。天宇受賣命。やがて大宮能賣命小坐イサとは。古語拾遺シユイ。此事を記せる文コトけ續ツギき小て。いと著明シヨウメイき事コトあり。古コ今イマ此コノ學者ガクとち。都ミヤコて其ソノ由ユを見得ミエとト倭人ヤマトノヒトありきは。何ナニちふ粗漏コソあらむ。其ソノは手力テカラと申イハは。素ソノよヨ御手ミテ小力チカラありし故ユの名ナ石戸イシド別ワケと申イハは。そソノは手力テカラ小チカありて石戸イシドをア開ア給マる故ユ此コノ名ナは。宇受賣ウケウと申イハは。神性カミサマの素ソノよヨ強悍カウケン猛固マウコあり。亦マタ也ヤの名ナ大宮オホミヤ賣ウと申イハは。其ソノ大宮オホミヤ小侍オホミヤノコサマひ給マへる故ユの名ナ亦マタ也ヤも知チざるは。餘アトり小斷見コタマシありき事コトあり。抑オシり此コノ御手ミテの御名ミナ此コノ出イと倭諸神ヤマトノシノカミとち。各オノオノ其ソノ功イサ有アリしことと申イハは。亦マタ也ヤも更マシなる中ナカ小チカ此コノ神カミの功イサはし。亦マタ也ヤも殊オトナリ小卓コシヤクれあり。然シカるハ此コノ神カミは。いと歡ウレシく笑ウツしく。物モノし給マへる。俳優ハイウ。八百ヤチ神カミの感カンく。扱アり笑ウツひし故ユ。大御神オホミカミを怪オモまシ。其ソノ俳優ハイウ。御心ミココロう。

おき給へる故ユ。兒屋根命コノヤネノミコトの廣ヒロき厚アツ称ナ。御耳ミミ小入チカりて。石戸イシドを細ホソ目メ小開チカとト石戸イシドを細ホソ目メ小開チカ給マへる故ユ。御鏡ミタマシ。大御形オホミカガタの映ウツれるを。弥ヤ怪オモしと思オモはして。稍オシ戸ドより出イ御ミし。手力テカラ男ヲ神カミハ。引ヒ出し奉マることをも得エ給マる。然シカれ。亦マタ也ヤも此コノ時トキの俳優ハイウハ。し。歡ウレシく笑ウツし。可カ笑ウツら。亦マタ也ヤも兼カミ命ノミコト。此コノハ。意イ思オモ慮ルりて。知チ分カひ定サ給マへる事コトも。悉シいと。於オら。事コトとを成ナべり。亦マタ也ヤも。思オモひ。結ムスくれ。御手ミテ力カラ男ヲ神カミの成ナれる。亦マタ也ヤも。天アメ宇受賣命ウケウノミコトの俳優ハイウ。事コト成ナり。始ハジ也ヤ。天アメ手力テカラ男ヲ神カミ。此コノ手力テカラ小チカ事コトあり。調テウ。亦マタ也ヤも。大宮能賣命オホミヤノウケウノミコト。大御神オホミカミの御前ミマエ小侍オホミヤノコサマ。奉マら。亦マタ也ヤも。趣オモを。古語拾遺シユイ。如ニ今イマ世ヨ。内侍ウヂサマ以テ善言美詞ゼンゴンミジ。和ニ君臣キミシ之間ノミ。令ラ悦ユク。儻トウ。宸襟シノエ也ヤ。と記シされ。亦マタ也ヤも。倭文ヤマトノフミ。意イは。後ノチ小内侍コウヂサマといふ。女官メカミあり。此コノ天アメ皇ミコ小近コチカく仕奉マりて。君臣キミシ此コノ御間ミマを執ト和ニし。亦マタ也ヤも。宸襟シノエの結ムスぶ。給マふ時トキハ。更マシなり。常トコ小善言美詞コトノハシキミジ。以テ悦ユク。亦マタ也ヤも。憚オソま。扱アる事コト。如ニ。仕奉マり給マひしと云イハ。倭義ヤマトノヨシあり。内侍ウヂサマを本ホ。

書小ウ。千ツ。ミ。サ。フ。ラ。ヒ。ヒ。也。訓。言。義。ハ。男。は。む。祢。と。外。事。小。仕。奉。る。を。内。於。御。前。小。侍。ハ。仕。ふ。る。義。也。サ。ム。ラ。ヒ。は。サ。モ。そ。は。師。説。子。佐。母。良。布。也。佐。は。眞。の。意。母。良。布。也。母。流。を。延。と。る。言。了。て。母。流。と。何。事。も。ま。れ。心。を。於。け。て。伺。ひ。居。る。を。云。常。小。物。を。守。る。也。云。ふ。も。は。と。人。も。も。る。云。と。云。も。此。意。有。り。ま。と。目。残。於。け。て。物。を。い。ふ。も。泊。舟。此。よ。把。風。を。待。伺。ひ。を。奉。ら。む。と。伺。比。居。る。意。有。り。然。也。バ。仰。せ。給。ふ。事。亦。ど。有。ら。む。布。と。云。ふ。也。伺。比。居。る。意。有。り。轉。り。後。ハ。侍。ひ。居。依。人。多。侍。ひ。と。云。ひ。侍。ふ。也。也。を。指。て。も。侍。ひ。と。云。也。侍。ま。と。君。の。御。前。子。在。を。云。よ。り。轉。り。て。多。く。相。對。する。人。を。敬。ひ。て。い。ふ。語。小。も。己。侍。ふ。聞。を。聞。侍。ふ。と。云。云。如。し。也。此。言。也。も。と。佐。母。良。布。有。る。を。中。昔。よ。也。佐。母。良。布。と。云。い。ま。と。加。の。添。て。云。辭。の。侍。ふ。字。だ。佐。母。良。布。と。云。い。ま。と。約。免。て。曾。呂。と。も。云。ふ。也。い。よ。い。よ。俗。有。り。と。云。れ。あ。る。が。如。く。も。今。ハ。添。て。い。ぬ。辭。此。サ。ム。ラ。ヒ。と。訓。む。も。意。を。同。じ。字。を。書。ぶ。少。く。成。ま。也。士。字。字。サ。ム。ラ。ヒ。と。訓。む。も。意。を。同。じ。

ち。て。此。内。侍。と。云。ふ。女。官。此。始。免。を。故。實。家。此。説。小。此。の。大。宮。能。賣。命。此。故。事。よ。也。起。ま。依。由。云。ふ。は。然。る。言。も。て。信。小。内。侍。の。官。は。此。神。の。此。時。大。御。神。小。仕。奉。也。給。へ。依。り。慣。ひ。因。れ。る。職。有。也。古。語。拾。遺。小。廣。成。宿。禰。の。記。さ。れ。あ。る。趣。も。也。を。事。本。也。と。云。そ。云。を。祢。今。世。内。侍。云。く。と。有。依。り。て。然。る。意。と。ハ。聞。也。依。れ。也。内。侍。と。ち。の。常。に。侍。ひ。居。る。局。を。内。侍。局。と。も。内。侍。所。と。も。云。ふ。彼。神。奎。の。御。鏡。也。此。に。坐。奉。り。て。内。侍。ふ。ち。を。仕。奉。し。免。給。多。故。也。内。侍。所。神。鏡。と。申。し。ま。と。神。鏡。字。專。ら。大。宮。能。賣。命。其。ハ。祝。詞。式。小。大。殿。祭。詞。此。次。了。詞。別。白。久。此。故。事。子。因。れ。也。其。ハ。祝。詞。式。小。大。殿。祭。詞。此。次。了。詞。別。白。久。大。宮。賣。命。登。御。名。乎。申。事。波。皇。御。孫。命。乃。同。殿。能。裏。尔。塞。坐。豆。參。入。罷。出。人。能。選。比。所。知。志。を。入。し。免。に。能。く。撰。び。止。む。る。を。

云ふ神等能伊須呂許比阿禮比坐乎言直志和志坐乎伊須呂許
比の伊を祭語よて須呂許比を須呂岐を延よる言小て
神あちの須呂荒ぶる事比有を鎮免和し給ふ由あり
皇御孫命乃朝乃御膳夕乃御膳供奉流比禮懸伴緒手襖懸
伴緒乎手躓足躓不令爲互朝夕の御膳きあし食と死を更
人くを云ふ比禮懸伴緒とを女官を云ひ襖懸伴緒とハ男
官字云へりそは比禮を字子領巾とりきて女の領よりけ
て袖茂れなく親王諸王諸臣百官人等乎已乘く不令在邪意
る物あり穢心無久宮進米爾進宮勤尔勤米氏咎過在平波見直志聞
直坐氏平氣久安氣久令仕奉坐尔依氏大宮賣命止御名乎
稱辞竟奉久登白と有る小て大宮能賣とほを以御名比義
詳小知らき神世小大御神の御前よ仕奉り給へる趣も知

られぬ也其たかの新宮よ移し奉りてハ有れど尚荒ぶる
於大御神此御心字悦懌ま於り給ひは事こと此祝詞小
て著明あり故その神世有は御功のまなく天皇命
此御前よ仕奉る人く此過なく故此詞尔ふて今詞よ
仕奉りし免給へとを申せるれ也故此詞尔ふて今詞よ
某我常尔仕奉留神等乃御心君親乃心尔令違受云くと申
して古學びる徒の幽了は神ま先祖の靈小仕了顯小は
君親小仕ふ依よ過犯以事なく手躓ハ足躓ハも爲し免也
且我不從姉家内此者とももの己が乘く在し免也と祈白以
事れ也但し右了引よ依祝詞式此詞は朝廷了て皇子あり
此過犯し形く仕奉るは祈祭了賜ふ御文亦依が朝廷の
御祭のみあらば中世までも宮仕する人くは更れ也末く

ふ依り藤原實方朝臣に集小あまよ坐に笠間の神に無了
せむ。舊小し人をいうで問まし。と詠る歌あり。天小坐はと
天すまは豊をう姫と詠める小同じ。宇都保物語。因也はり
の巻。笠間。ハ神の多う依くおてとりく。とある。前後
此文を思ふ。此神。大は舊小し人。疎く成ぬる中を。笠間
小由ありて聞也。神。大は舊小し人。疎く成ぬる中を。笠間
神にはし坐。びを。いうで中直して。は。問相。ま。成
むや。と云。依意あるを。右に祭文小思ひ合はま。宮。咩神と。
餘小三柱を合せて。笠間神と申は。こ。知られ。然る疎き中
を結び和ひる功。比有。こ。大宮。賣命。は。事小よく符へ。斯
て宮。咩四柱と申せるは。神名式小。造酒司。坐。大宮。賣。神社四
座。並。大。月次新嘗。とある社を申せ。文徳天皇。紀。再。衛。三年
九月の下。造酒司。酒

甕神。從五位下。大邑。刀自。小邑。刀自。神等。並。預。春秋。祭。と。あ
る。即。相殿の三柱を云ひ。宮。咩。神を合せて四柱あり。然
れども此を。笠間神とも申は。由。未。思ひ得。前。神名式。越
加賀。国。石川。郡。あ。ぎ。笠間。神社あり。常陸。国。加賀。国。坂井。郡。
郷名。笠間。加佐。万と有れど。共。由。何。と。し。も。聞。え。孫。む。
宮。咩。神を。笠間。神と申は。ハ。別。ある。べし。彼。祭文の。四。柱。を
五。柱。と。有。る。本。を。も。捨。て。後。人。れ。お。能。く。考。ふ。べ。き。あり。
それ。造。酒。司。小。祭。られ。給。ふ。事。は。加。の。宸。襟。を。悅。懌。ま。た。了。仕。
奉。依。人。あ。ち。の。手。蹟。ひ。足。蹟。ひ。爲。し。免。去。君。臣。に。間。を。和。し。給
ふ。有。功。小。因。る。事。あ。依。べ。し。第八。詞。引。さ。る。酒。字。言。和。ぐ。し。
御。哥。の。意。を。も。思。合。ま。依。し。○。鍊。胤。云。酒。の。愛。さ。く。妙。ある。物
ある。事。ハ。今。更。了。言。べ。く。も。非。ざ。れ。ど。少。う。思。ふ。旨。あり。其。を
ま。た。君。臣。父。子。夫。婦。の。間。母。酒。も。て。結。び。固。免。元。日。の。屠。蘇。を
始。免。万。の。祝。ひ。事。此。を。用。ひ。交。と。云。こ。と。あ。し。然。れ。む。八。百。万。
神。さ。ち。も。免。で。聞。し。免。し。凡。人。も。此。を。嗜。ま。さ。る。者。少。き。ハ。さ
も。有。べ。き。事。あり。抑。酒。を。用。ふ。ま。た。用。ふ。る。は。よ。く。心。樂。く

祀もあろく思ふえが諡ひいで舞もまほくいと奇 給へる物のて謂ゆる言和ぐし咲ぐしと戴き飲みて此を掌
をば酔ふ小言上戸泣上戸腹立上戸あや酒癖ありて酔
き者あり此は甚も怪事あり然有む小此を造り出し給へる久
斯神まよ此大宮能賣神いう酒癖もハ常の心かけ小
は今云ふ限り非ざらむと酒癖どもハ常の心かけ小
の事小非ざれむ方おし何は思ひ人もハ常の心かけ小
美少御神の神徳を畏まよ此の大宮能賣神の造酒司
小祭られ給ふ御由緒をも思ひ奉りては悪き酒癖をむ
速うよ除き去給ふべく宮比の御霊を祀祈み奉るべき事
よお 儲まよ此神の亦名茂宮比神とも矢也波く伎神とも
申せり其は建久年中行事小六月十八日神事此條小請預

神戸所進缶二口菓子糺祭宮比矢乃波く木神也宮比神御
後御前乾玉垣角也矢也波く木神御在所御
前巽方荒垣角也○御前とを本宮を申せり先祭宮比次祭
矢也波く木内物忌父等祭宮比神外物御巫内人著衣冠相
副申事由委不記其後各於齋王殿預件神直會と見え二
社小祈禱て白祝詞の文中小宮中平仁神事乎藝米令奉
仕給比禰宜神主内外物忌色く職掌供奉人等長久勤令奉
仕給止恐三恐三毛申と有依ハ錯なく大宮賣神の神徳小
係れる祈詞ありと思する小果して參宮嚮導記小宮比乃
神社本宮荒垣大宮比賣神矢野箒神社本宮荒垣天鈿女命
と下記嚮導記を然しも古書とを見えざれど其集はて此
記せる説どもハ凡て古説を奉くる物あり

神を宮比神と申し由を。ま於宮比てふ語の義よと説む。比を夫理の約れる小て。鄙夫理を鄙備と云ひ。里夫理を里備と云ふも同く。其風を云ふ辭小て。即風字は義あり。此外某夫理某備といふ辞いと。然らばそれ宮風とは。如何なる多し。これ同じ事と知べし。然らばそれ宮風とは。如何なる風を云ふと云む。言語ハ更なり。立振舞小。自於うら小威儀具はして優美しく。手は躡ひ。足の躡るを有こと無く。ま自於のら小可笑みありて。見る人あまは愛あひ。君小侍ひて。能く常は御心をししくみて事を調ふ。或る餘の仕人あど君は怒り小觸らむ時を。美詞をもて和し参らせ。其仕人の君を恨み奉はじく。善言を以て言直し宮

進免小進免て仕奉らる免。或る君は鬱悒あらむ時あど。自然了其事は休むべく。時小よ事小依ては綺語をも交りて悦懌め参らせ。参入に罷出る人の擇びを更あり。何さはの嚴き者小も。面勝ち向ひて。怖れこと無く。糺し顯はし。まゝ然るべき時小當てては。人の恥て得爲まじ。狂態狂言をも憚らば物して。並居る人を動もし笑を以ち。是眞れ宮風あり。大宮能賣命ハ。然る神徳小ねはせる故。宮比神とも申せるなり。其を上り。何らまし。説とる。此神の神かゝる宮風をしも。心元より直実洒落ふして。強悍猛固を兼と依り。謂ゆる敬義。謂ゆる仁智を具せむ。豈あらむ。至らむやも。但し此を姑く宮比神の大神小仕奉らる。事小よりて。君小仕ふる趣を云ふ。あれど。此心む。肩を推て。親

事へ師小事了。兄事へ友小交はり。弟を愛し。妻子斯て
奴婢をも恵みれむ。能く宮風を習ふ人と云べし。其宮風を習ふ
故事とも古書に往く見え。依中。允恭
天皇に御せ了。輕太子。たらし給る罪有りて。物部大前宿
禰の家小逃入ませるを。穴穗王子軍を興して。其家を圍み
給ふ。大前宿禰まる出て。手拔あげ膝うちちる。宮人の足
結。小鈴落。小蛇と。宮人よよむ。里人も也免。と歌ひ舞。た。
王子の御前。來て。輕太子を攻給ふ事を諫免し。事有り。膝
打こと。何。恰く。樂む時の態。よて。大神宮。伎式帳。ま。神樂
哥。お。小。も。其。證。哥。あ。ま。見。え。る。古。史。傳。に。注。せ。る。が。如。し。
は。疑。あ。く。宇。受。賣。命。に。俳。優。し。給。へ。る。時。の。狀。を。擬。あ。る。戲
舞。小。て。穴。穗。王。子。の。急。小。攻。給。ふ。銳。氣。を。あ。は。し。和。免。奉。ら。む

ど。此。態。あ。了。師。説。と。甚。く。異。あ。り。そ。は。古。史。傳。に。委。く。注。せ
考。へ。て。辨。る。ど。師。の。記。傳。三。十。九。卷。小。云。れ。し。説。と。を。合。考
ふ。考。へ。し。そ。は。此。歌。小。宮。人。に。足。結。の。小。鈴。落。小。き。と。云。依。宮
人。は。宇。受。賣。命。を。い。ひ。宮。人。也。よ。む。と。云。る。は。加。の。八。百。万。神
此。笑。ひ。響。め。る。哉。云。比。里。人。も。也。免。と。云。依。を。神。世。小。宮。人。の
か。く。舞。々。依。字。宮。人。も。り。動。み。笑。へ。了。然。れ。バ。今。我。が。そ。を。擬
び。て。物。依。る。舞。を。し。見。る。里。人。ら。も。笑。了。と。云。了。依。意。あ。了。神
哥。よ。宮。人。の。大。よ。そ。衣。ひ。ぎ。遠。し。著。の。よ。ろ。し。も。よ。大。よ。そ。衣。
と。云。る。哥。を。古。語。拾。遺。に。崇。神。天。皇。に。御。世。了。天。照。大。御。神。を。
倭。の。笠。縫。邑。了。遷。し。祭。れ。る。夕。了。宮。人。さ。ち。れ。詠。る。あ。り。と。云。
了。此。哥。も。大。前。宿。禰。の。哥。と。合。せ。考。ふ。る。小。宇。受。賣。命。の。俳。優
せ。る。時。の。狀。を。よ。免。る。哥。を。聞。え。と。り。委。く。斯。て。右。に。歌。を。宮
人。振。と。云。々。し。見。え。と。依。を。師。説。の。如。く。歌。に。首。の。詞。を。取。て。

名けぬ依物了ハ有れど。此歌正了大宮賣命の故事をもて
詠るが且小職員令小宮人謂、後宮職員令、内侍以下十二、女司是也見え、後宮
職員令小宮人謂、婦人、仕官者、是、惣号也と有る此を婦人ハ宮仕を依こ
と。大宮能賣命よと始れる小思合まれむ。大前、宿禰の歌ハ
宮人を此神を指し依れ疑ひあし。然れど後了ハ宮仕を
て。哥小も宮人と詠るが多し。まゝ神の人をば、男女を通じ
宮人など神職も稱ふ言とありぬ。然れむ眞の宮風と
云ハ、男女を云ハ、大宮能賣命亦名、天、宇受賣命の風小強悍猛固け
質あてはと自於ら小滑稽優美ハ質をの祢交ハ眞の
宮風と云ふも足らば諸書に閑藻風姿都媛など此字を三
ヤビと訓ふれど。此等此字義ハ宮比の一端小こそ有れ眞

此宮風の義ハ盡さば。然る小世此歌作也。物語家あと稱ふ
徒をばて然る故實小疎く。右の字とも此義小去が也。は
万葉小。三ヤビヲ云了游士也かき伊勢物語に昔人ハカヒトもか
く伊知速イチハヤき美夜比ミヤヒをれむあは依れ有る類を引出て證と
ぬし。謂ゆる優艶の容貌於て。管絃をもて遊ハ。月小浮
き花小去死て。例此をば歌をみ耽也。そ茂媒と志て築地の
崩れを伺ふ類の人まし宮比男と思ふをいせ淺ましく可
笑くあそ。神樂哥古本に稚れむ美也比も知らば父が方
説よ。我ワいまど稚れむ宮風とるねさも知らば父が方
似て拙ツきり母ハハも似るとり。只神を給むと云ありと云
れしを然る言あるが若くハ非然然をのあれ哥文作りら
宮風の本義を得知らば群庸を集めて利口艶詞まよやハ

と誣ひて、かの謂ゆる人土子を賜ふ。ちて亦、名を、矢之箒神
倫の多りるは、旁痛き事あらばや。ちて亦、名を、矢之箒神
ども申は由を、いはぶ。詳小思ひ得ぬと、酒殿に神樂歌を、酒
殿を今朝はあ掃きそ、舍人女に、裳ひき裾ひき今朝を掃て
き。と有。酒殿は主と大宮能賣神祭られ給ふこと上
云、依如くれば、矢之箒を、ハ屋之箒とて、大御神の御前小
仕奉らる。時、其御屋を掃淨め給ひし事小。殊ある由緒
ありて、如斯も稱す申せる小や。然れを哥の意を、酒殿に仕
大宮賣命の仕奉らる。職を、おは、依者ある故に、其、舍人
らに、けさ裳ひき裾ひき掃る。処小し有れを、他人あど、此
殿を、まよ掃、こと。ちて是、小て、天、宇、受賣命まよ、御名、大
宮賣命の有功に、大概を、説、竟、と、依、が、右、れ、事、どもを、思、ひ、お

おけて、今、白、以、詞、了。かく、朋友、親、族、他、諸、人、乎、母、睦、比、集、幣、云
云、とも、申し、宮、比、乃、御、聖、乎、幸、幣、賜、閉、とも、申し、せ、る、れ、也、其、を
男女を云、君親小仕ふる人を更小も云、君親を、持、ら、ぬ
人も、人、道、を、行、を、む、は、必、神、に、仕、す、は、有、は、ら、ら、ば、夫、妻
あ、く、は、有、べ、ら、ら、ば、は、と、人、小、交、ら、ら、ば、有、る、か、死、也、是、を、謂
ち、依、五、倫、の、道、の、る、が、某、く、は、道、は、諸、越、籍、どもは、更、あり、教
多、れ、書、ら、小、説、記、せ、ば、其、を、見、て、常、小、講、習、を、母、爲、べ、し、但
今、世、古、学、の、徒、お、ど、加、茂、大、人、鈴、屋、大、人、の、世、より、お、て、も、古
道、を、知、れ、る、人、お、く、只、漢、説、の、み、轉、る、を、学、問、と、心、得、と、り
し、時、よ、出、は、し、其、旧、弊、を、操、直、さ、む、と、漢、風、の、教、導、講、習、お、ど
は、拙、く、陋、事、を、排、斥、も、為、ら、れ、し、れ、ど、其、を、そ、れ、旧、習、を
改、免、て、皇、国、の、古、道、小、入、し、免、古、道、を、学、問、に、骨、髓、と、し、て、謂
ち、る、五、倫、は、道、乃、教、お、ど、は、其、上、り、て、学、び、得、し、免、む、の、事

あるを今の古学者さる不言の真意を知こと無く漫り小
二翁の色了吠て志あり息了講習を志す五倫の道は本
義を更ふまは童子も習ふべき洒掃應對進退は節度を
さる得知らむて哥文など例の口敏くいひ誇りそ字古
学の大倭魂と心得る倫を多う勉る穴あはむ俗の漢学
者むり物知らぬ者多く俗は古学者ばる文盲無恥亦
るは無そらし故已た漢籍といへども眞の理は符ひて我
古道の羽翼とあるはき物も強ても講習を志勉むと為る
ふいので吾が黨の小子俗は古學者ら此文盲小倣を俗
和学者と云ゆ人々を見る小哥よみ文かく法を少り覺
ゆるを我こそ無上至等の道を得る者よと諸人子誇り
横柄を主せける者の多り俗は何ぞや哥文詞章の道はい
り小よく為得るゆとも其はあは藝者こそ何き彼小唄
淨瑠璃おど作る者も俗は物知らぬ漢學者小似あを無く
伯仲せるはであす俗は物知らぬ漢學者小似あを無く
まさ俗の漢學者を見る小其道を学おとは云へど固より
行ひ難き道ある故了自らその道有らばお能はば放蕩
無礼の者多く却りて其を儒家は通人おゆと云やう小自
らも思ひ人も志る思へるハいゝるぞや謂ゆる經書の字

義小通じ詩賦文章おどいり小よく作り得るとも一向小
其行狀の實直あらさるは學者とは云はらば
宮比神は御神徳を仰ぎ乞祈奉了神習をむりハ君臣の道
は更小も云を父子夫婦兄弟朋友の道はよ自たうらよ
具を了て子孫の八十連属蕃了榮え家門の賑は限了無る
彦し是を則人ハ眞の道小を有らば

次小はよ別小手を拍ち右はよおとく拜み了

九十

辭別氏宅神屋船命乃御前乎慎美敬比此乃家居乎伊豆
乃眞屋登幸幣給比突立留堅乃柱乎齋柱登幸坐氏心静
祁久天上血垂飛鳥能禍無久桁梁戸牖乃錯動鳴事無久
夜目能伊須須伎伊豆都志伎事無久守賜比幸幣賜閉止

畏美畏美母拜美奉雷。

宅神屋船命と申は。第四詞小委く申せ依如く。伊勢此外宮小坐まは。豊宇氣毘賣命。まは御名は。宇氣母智命の御殿家居小幸予給ふ草木の御靈の御名有。その奥儀抄。臣食神宅神ありと見え。下小引く大殿祭詞。屋船豊宇氣姫命と有。伊勢比御鎮座本記小。天照大御神比神靈實を納免奉る御船代を云ふ。船代則謂天枝木屋船。瑞舍名号屋船縁也。何。然れむ。船代とは。屋船代の畧語。屋船とは。御殿の別稱。あるが。屋を神小まれ人。舟は。乗る住ふ物。ある故。小舟とは云。予。此神その屋船を幸予給ふ神。坐に故。屋船命を申。

大を知。祝詞考。屋船を借字。弥生根あり。木と殺。説れ。して。弥生小生。茂ら。あむる神。ある故。云ふ。と。信ら。ま。は。て。家居。伐。アラカ。云ふ。古書。小例。い。多。く。言。義。は。舊。説。小。在。所。あ。と。云。依。が。如。し。伊。豆。乃。真。屋。て。ふ。語。は。出。雲。國。造。神。壽。子。見。え。て。伊。豆。と。は。淨。く。嚴。志。死。を。云。ゆ。詞。真。屋。の。真。木。真。水。真。金。を。云。ふ。真。子。同。じ。く。屋。を。美。と。依。詞。小。て。然。る。嚴。く。清。淨。ぬ。る。真。屋。と。幸。予。給。予。と。申。は。あ。す。突。立。留。堅。乃。柱。と。は。家。居。子。立。依。柱。の。多。り。る。中。小。第。一。小。謂。也。る。大。極。柱。と。て。家。比。真。中。小。立。る。柱。を。云。ふ。大。極。柱。を。ま。い。大。黒。柱。と。も。書。來。れ。る。小。抄。き。る。世。の。学。者。と。ち。れ。彼。子。と。り。此。を。取。り。何。く。ま。と。論。ま。れ。ど。も。大。極。木。黒。と。も。小。我。が。古。語。子。非。也。後。子。書。さ。る。字。亦。ま。は。此。を。何。も。て。も。有。べ。し。道。理。の。上。よ。り。云。と。きた。中。央。不。立。る。柱。あ。れ。バ。大。極。と。書。く。が。宜。り。る。度。く。覺。ゆ。

れど。此柱を家の真中小立のら小自於ら煤びて黒り神
依故了。大黒柱と云、せもいふは、一理なき小も非きかし。神
ま、皇は御殿小を、殊に大なるを真中小立て。此を齋柱と
も。心御柱とも申せ。其を大殿祭詞に、奥山乃大峽小峽尔
立留木乎。齋部能齋斧乎。以伐採氏。本末乎波。山神尔祭氏中
間乎持出来氏。齋鉏乎。以齋柱乎立氏。皇御孫命乃。天止御翳
日止御翳止。造仕奉禮留瑞止。御殿乎。汝屋船命尔。天津奇護
言乎。言壽鎮白久。云くと見え。此、齋柱と云ふは、即御殿の眞
採る小。其山をトひ定免。まづ山神を祭りて後、伐採る式
ま、其突立る穴を掘る式など。委く貞現儀式の大嘗宮を
造る事の條小見え。ま、神宮小。其御柱を立る趣も。延暦は
と、就て見るべし。新宮造奉依事を載せる條に。正殿を造り奉る
内宮儀式了。新宮造奉依事を載せる條に。正殿を造り奉る

小。吉日を撰びて。ま、於山口祭所にて。次小を此心柱を造り奉
依了。吉日伐撰び。内人あち杣入し。木本祭を行ひ。木本祭
伐る木の本を祭るあり。杣入と云、山入と云、が如し。其忌柱を造り畢て。杣よと出し。
御前追返く。運來了て。正殿の地了置免。次は吉日伐撰び。地
鎮祭あり。畢りて後小。新宮地は草刈始て。宮地を穿始免畢
て。大物忌といふ内人。ま、於忌柱を立始免。然後小。諸役夫ら
小。其四面の柱を立しむ。是謂ゆる御柱立は行事あり。凡そ
種く重に御式とも有。委くは本書の解。抑、古の御柱のこ
と。猶古書等小。心御柱一名忌柱。一名天御柱。とも有る小。依
了て考ふ依了。神世の初免。皇祖二柱大神は。大地を修理

固免給ふ。天津神の賜へてし。彼御矛我國中此御柱と突
立給ひし。大地を是小よて締め堅ま。斯て地上小
出。所を天御柱と見立。其を中央の柱と爲て。八尋
殿を造立。ま。是殿作。の始。此を左右小往廻
て。御夫婦の堅免し給へる禮式。國生始免給へる
を思ふ。神宮は。皇。御殿乃中央。立る柱を。齋柱。天御
柱。心御柱と稱ふ。事。即。此神世の由緒。因循。給ふ
御式。ある。著く。そは御柱のみ。其宮作。は。其
小效。給ふこと。申。も。更。皇。祖。二柱。神の。八尋殿。を。他
段の傳。よ。委。く。ち。て。神宮。及。び。天皇。此御殿の。あり。有。し。ら。ば。
云。見。べ。し。

御子。あ。ち。臣等。ハ。更。あ。て。國造。八十伴。緒の家。庶人。此家居
も。は。其。狀。小。效。ひ。作。り。む。こ。也。今。世。小。も。諸國。の。百姓。ま
でも。故。實。は。よ。く。大。極。柱。を。立。て。其。を。重。し。た。事。小。は。る
戎。以。て。知。れ。し。江。戸。あ。ど。の。如。く。繁。花。あ。る。土。地。小。て。た。漸。く
れ。ど。田。舎。う。ハ。凡。て。然。る。小。故。實。を。忘。れ。て。新。規。は。移。り。替。る。事。と。も。有
類。ひ。の。古。風。を。残。り。か。く。て。古。く。此。柱。を。重。む。じ。け。る。事
狀。を。顯。宗。天。皇。紀。了。天。皇。稚。く。ね。は。し。坐。る。時。小。難。を。避。て。御
名。を。か。く。し。播。磨。國。赤。石。郡。あ。る。縮。見。屯。倉。首。が。家。小。仕。子。給
ひ。し。時。小。そ。此。新。室。壽。の。御。言。小。築。立。雅。室。葛。根。築。立。柱。楹。者。
此。家。長。御。心。止。鎮。也。取。擧。棟。梁。者。此。家。長。御。心。止。林。也。取。置。椽
檼。者。此。家。長。御。心。止。齊。也。取。置。簷。檼。者。此。家。長。御。心。止。平。也。取。

結繩葛者此家長御壽之堅也取葺草葉者此家長御富之餘也云く也第一宣子孫柱を決るく大極柱と聞ゆる小て所知く是を以て今白以詞小突立留堅乃柱乎齋柱登幸坐立心靜邪久とは申せ也。そは其大極柱を立る意を御殿小意をおまて直小齋柱とハ稱ざる意抑この大極柱は事を示せて齋柱と幸へ坐せを云るあり。本はも上小云ぶさく。二柱神の國中此固免此御柱八尋殿此中央の御柱擬ふ柱小し有る哉右の室壽乃御言小築立柱楹者此家長御心中鎮也。と宣へ孫思ふ。二柱神かの御柱を立堅免坐る小よて大地を堅まりて終古も轉崩あることを無くば其御柱を回め坐して事始免給ひし

よて萬事此調へる故。加此神習ふ彦き人小し有れを其御迹小效ひ奉りて此柱を重む。家此固免を然る物。其家主の心を鎮むる表物とぞ爲る。其は神世のむ立給ひし御柱をやがて此大地の中心。其中心此地上小出る所を八尋殿の真中此柱と爲給るは是大地の初給へれを此世界初とる大宮あり。そは此二神世界を始免家を立まば其地其家大ははれ小ははれ奇くも其區界事はし俗の古学者漢学者などの都ても闕ひ知ざる事。然れむ上代より必ざる表示なくは叶を念事小こそ是を以て右小引く室壽の御言小ま於第一小柱を稱て心此鎮了ふ由を述給ひ。さて其柱小因りて心の林心此齊心の平たれと哉こそは宣ひた免猶思ひ合ま彦きは万葉

二卷小。日竝皇子尊を慟奉れる舍人等が歌け中。眞木柱。太心は有しりど。此吾心鎮々祢於も。と詠免る眞木柱を。太小係とる發語とは聞れど。彼御言よ合せて思牙バ。此歌此鎮々祢於を。柱小のけて。大き小して動々怒心あてしも。此悲み不ハ堪と云るれ也。大あるを太とも云を。古の常多り也。古に猿樂舞の詞。男の心と大あく柱は。太しとも太加れと申せむ。おど云るを思ひ合々。室壽の御言此意小も。此哥の意は牙。此等我思比合はまば。古人は殊小言よも。能叶へる詞あり。此等我思比合はまば。古人は殊小言。擧六そ爲され。天地此固免の御柱。擬へて。家小大極柱を。あて。其柱。準牙て。心を靜むる事も有し。あては。著明也。是を以て。今詞小心靜。邪久と申せ。依あり。然る不俗の古学者流を。か。

る筋の事はし。あて。外国。了。此み談。事と思ひ。免るを。甚く固陋あり。吾黨の子ら。然る意を牙をも思ふべし。ちて。天止。血垂飛鳥。乃禍無久。と云よ。下。此詞は。大殿祭詞。小。天乃。血垂飛鳥。乃禍無。堀堅。多留柱。折梁。戸牖。乃錯動。鳴事。無久。引結。弊留。葛目。能緩比。取葺。計魯。草乃。噪岐。無久。御床。都比能。佐夜。伎夜。女乃。伊須。伎伊。豆都。志伎。事無久。平氣。久安。氣久。護奉。留神。御名。乎白。久屋。船久。能遲。命屋。船豐。宇氣。姫命。云。と有る。が中。よ。と拾。いて。申。せ。也。凡て古き祝詞。小よ。る。小。を。必。ス。そ。此。心得。あ。く。を。有。修。ら。ら。に。其。を。ふ。る。き。天。止。血。祝詞。は。皆。天。皇。命。の。神。よ。白。し。給。ふ。御。言。ふ。れ。バ。あ。り。天。止。血。垂。飛。鳥。乃。禍。無。久。也。祝詞。考。小。本。草。と。云。ふ。漢。籍。小。姑。獲。鳥。と。云。ふ。鳥。夜。飛。て。屋。ま。ゝ。兒。此。衣。了。血。を。落。せ。む。わ。ろ。し。と。言。ひ。

はく鬼車鳥とて。血を滴る鳥も有り云。後世うぶめを
云は。かの姑獲鳥小當ると云ふ人も有り。古さ依類の鳥は
怪。さうも有りもて云。おらむ。と云ま。と流。は。従。ふ。ま。し。然
る。ハ。今。も。田。舎。小。て。は。驚。鳥。巢。れ。ど。の。血。垂。る。物。を。喰。も。ち。來
て。血。を。垂。し。ま。い。葦。草。茂。穿。ち。お。ど。を。不。祥。と。ほ。る。処。母。多。か
ま。ば。あ。り。師。に。記。傳。し。此。説。ま。い。み。じ。き。誤。と。志。て。此。文。の。血
知。陀。流。と。一。抄。意。小。解。れ。と。ま。い。信。が。折。梁。戸。隔。乃。錯。動。鳴。事
と。し。其。も。古。史。傳。し。云。ふ。を。見。べ。し。無。久。と。は。此。ら。れ。志。免。固。め。る。錯。く。さ。び。あ。ど。れ。緩。び。動。く
あ。を。無。く。と。云。あ。り。夜。目。乃。伊。須。く。伎。伊。豆。く。志。伎。事。無。久。と
は。夜。目。を。夜。眠。れ。る。わ。ど。を。云。ふ。朝。は。目。に。覺。と。る。を。朝。目。と

云。小。對。する。言。れ。り。と。師。説。あ。り。大殿。祭。詞。に。夜。女。と。伊。須。く
伎。を。加。茂。翁。の。伊。を。發。語。小。て。古。事。記。し。神。武。天。皇。の。后。に。御
母。神。の。矢。小。陰。を。突。れ。て。立。走。り。伊。須。く。伎。と。何。味。小。同。く
て。心。も。心。あ。ら。ば。ま。ろ。く。事。あ。り。伊。豆。く。志。伎。事。無。久。と。万
葉。小。旅。路。れ。ど。小。恙。あ。く。と。云。は。過。ち。滞。り。あ。く。と。云。ふ。意。あ
ま。ば。右。の。伊。須。く。伎。子。連。け。云。べ。き。言。あ。り。と。有。り。此。れ。を。此
れ。と。る。如。く。夜。眠。れ。る。わ。ど。小。物。を。あ。り。て。人。の。家。居。小。屋。船
そ。と。ま。ま。杯。し。て。驚。く。ぬ。ぐ。ひ。を。云。あ。り。神。に。幸。ひ。無。く。柱。に。堅。め。固。加。ら。で。は。折。梁。戸。隔。れ。錯。ま。ま。り
無。く。夜。目。の。伊。須。く。伎。伊。豆。く。志。伎。こ。と。有。あ。と。く。人。は。於。倭
魂。を。む。祓。と。立。祓。む。謂。ゆ。る。視。聽。言。動。小。お。ま。き。て。覺。え。ば。邪。道

小率られ、妖物小誑惑せらゆ、事此出來るを。彼室壽の御言、準へて、まは倭心の柱を固く太く静め立て、蘆藿をば心此平椽椽をバ心此齊ひ棟梁ハ心此林とも思ひ成ゆ。此神小祈白して、取葺く萱の噪なく、夜目のいほ、支伊豆豆志伎こそ無ぶとく、幽顯此間をよ九辨へて、神の御心違ふと無く學び勤むるを、神習ふ眞此古學と云べき也。儲より學び至るべき學問の様を、師の著されし書等も更にも云、已が書等も記し出せる事ども是あり。儲まゝ此の因り、思ひ出、依事あむ有る。そは大殿祭詞小。屋船久く能遲命、屋船豐宇氣姫命とあ依下小、俗謂宇賀能美多麻、今世産屋以辟木束稻置於戸邊、乃以米散屋中、止類

也とあり。宇賀能美多麻とハ、豐宇氣姫命の亦名あり、然るを俗謂とハ何ぞや、斯て久く能遲命と申は、豐宇氣姫命の木、幸へ給ふ御灵の名あり、此既云、如くおれを謂、宇賀能美多麻と云るハ、久く能遲命、豐宇氣姫命と申は、二名、産屋の戸邊、辟と依木と束稻を置く故也とる注あり。實中世よ、然しも聞えはる事れる故、加茂翁も師も、此義を解し得られ、加茂翁ハ、散米は、新宮小禰神の入來む字、饗し退存はる也、産屋もその屋此守、木と稻を置き、米散散、ハ、悪神を饗し退らむる由、と説き、師も其故よし何ある事小、慥小心得がぬし、と言はれ、師言長るるを、此既古史第十三段、然れど、此其戸邊、小辟の徴、辨へられ、今更云、木、然れど、此其戸邊、小辟木と束稻を置くことは、稻ハ豐宇氣姫命の御靈、小よめて、成

れる物な依故了。それ憑座ヨリイ小たき。木はそれ分ワケ靈レイ久く能ス遅シ命の御靈ミレイ小成コナリ依物なれむ。其憑座ヨリイとして置オケるふらむ。斯カて散米サンベイはる事は。悪神アクシ小饗コケイはる義ヨシ小非コヒは。妖鬼ヨウキの甚シく嫌キひ恐オソはく物ある故了。追オヒ難ナシふと志シて。打ウチ拂ハラふ義ヨシあり。旅ツリ行道ミチの手向けは。切キ麻マと米とを交マシりて散サンはると。然カるは往ヤキ年シごを其心ココロむす甚シく異イなり。思オモひ混マシふべからむ。我ワが許ヨク小幼コナリくて。幽境カウシの山人シヤンジンを伴トモをれて。年久トシキウしく役ヤクをれぬ。寅吉トシキチと云ふ者居チぬ。文政四年五月ワナシは或日ナニニヒ小人コナリく火ヒ穢ケガレの物語り小及びて。穢ケガレ火ヒのもとは。伊邪那美命イセナミノミコトは。火神ヒノカミを産ウマ給へる時の後ノチは物よモノ起タれ。伊勢イセ神宮ノミヤの御定ミヨサズメ免マフ小も。産火ウマヒを重オモた汚ケガレきと立タられ。胞衣ヒヤクを納ウケめたる

者モノは穢ケガレを。日ヒと定サられしも故ユヘある事ありと語カて相アヒて在アり。依ヨり。寅吉トシキチ傍カタハラ小き居イて。豆マメはまと云ふ物あり。知チ給へるやと云ふ。吾ワも人も其ソノ何ナニな依物ヨリモノぞと問トふ。己オノさたし山小居ヤマコイとてし時トキは。友トモとち連ツレ立タて。月夜ツキヨは里サト近チカき野ノ小出コデる依ヨり。長ナガ四五寸許チヨウある小人コナリの髭ヒゲ生ナるとる。七八寸許チヨウり依ヨり小馬コウマ小乗コノリりて。甲冑ケウを著キし。弓ユミ鎗ヤリ太刀タチの種タネは武器ブキを持モちて。いと數アヒタ現アラたれ出イて。入イ交マシり合アヒ戦セ依ヨりを見ミて。甲冑ケウの製サシまは鎗サシの鋒サキ太刀タチの刃ハの光ヒカリなど。人間ヒトの小異コナリる事コト無ナし。いと怪オソシく覺オホえて。捕トり見ミをやと思オモへど。神速カミヤスな依ヨり様サマあり。れり捕トり得エべくも覺オホえ給タバ。友トモとち。小石コイシ交マシりぬる土ツチの塊カマ

れる物な依故す。それ憑座ヨリイ小たき。木はそれ分ワ靈レイ久く能ノ遅チ命の御靈ミレイ小成コナ依物なれむ。其憑座ヨリイとして置オケるならむ。斯カて散米サンける事はコト悪神アクシ小饗コケける義ヨシ小非コヒまはは妖鬼ヨウキの甚シく嫌キひ恐オソゆる物ある故す。追オニ難ヤラふと志シて打ウチ拂ハふ義ヨシあり。旅ツ行コ道の手向けはテ切キ麻マと米コメとを交マりて散サンれと然シるは往オキ年ネころ其心ココロを牙キバ甚シく異イなり思オモひ混マふべからむ。然シるは往オキ年ネころ我ワが許ヨク小幼コナくて幽境カクレジの山人サンジンを伴トナリられて年久トシクしく役ヤクをれぬる。寅吉トモキチと云イふ者居イあてし。文政四年五月此或日コノチノヒ小人コナくを火ヒに穢ケガレの物語り小及コトびて穢ケガレ火ヒのもどは伊邪那美イセナメ命ミコトに火神ヒノカミを産ウマ給タマへる時の後ノチに物よモノと起オキれり伊勢イセに神宮カミヤの御定ミヨサ免マフ小も産火ウマヒを重オモた汚ケガレまマと立タられ胞衣ヒヤクを納ウケめたる

者モノに穢ケガレをケガレ日ヒと定サられしも故ユある事ありと語カり相アて在アり依ヨり寅吉トモキチ傍カタラ小コき居イて豆マメ切キまマと云イふ物あり知チ給タマへりやと云イふ吾ワも人ヒトも其ソノ何ナニなる依物ヨリモノぞと問トふマ已マきたり山小居ヤマコイとてし時トキに友トモどち連ツレ立タて月夜ツキヨに里サト近チカき野ノ小出コデり依ヨり長ナガ四五寸許ガクある小人コナの髭ヒゲ生ナとるが七八寸許ガクり依ヨり小馬コウマ小乗コノリりて甲冑コウケウを著キし弓ユミ鎗ヤリ太刀タチ形カタど種タネくは武器ブキを持モちていと數アツク現アラわれ出イて入イり交マり合ア戦セま依ヨり見ミとて甲冑コウケウの製サまマと鎗ヤリの鋒サキ太刀タチに刃ハの光ヒカリありと人間ヒトの小異コナること無ナしいと怪オソく覺オモえて捕トラり見ミむやと思オモへど神速カミヤ依ヨり様サマありれり捕トラり得エべくも覺オモえ給タマは友トモどちを小石コイシ交マりぬる土ツチの塊カマ

を取て。散く小打たぐはる。何處とも無く。皆見えに成れ
て。打殺しあるが有りやと求むる小一打も無くて。石塊あ
ぞ小皿たきて有しれ。山を歸りて。其事を師の山人に申
せ依り。其は豆たまと云ふ妖物。小の産の穢物。まゝ胞衣を
隠し納むるは。等閑あれ。鼯鼠を生じるを。其中小然る
怪を。形まが有て。小兒を驚かし。驚かし。夜啼せし。猶種
種の妖まれして。小兒を誑かし。惱はあむ。其を小兒の時
みあら。其人は生涯小も妖を。おに物あり。彼謂ゆる鎌鼯
此態とて。物も見えに。身切ら。事あるも。此が年經と
依物の爲る事あり。然る小豆たま。甚く精米を嫌ひ畏はる

故小胞衣を埋むる時小。少く精米を。それ器小入れて藏む
まば。其物生ぜ。總て鼯鼠ハ人の血乃土を塗ま。依よ
生じて。子成も生蕃に物ありと。教られ。きと語れ。吉が山
より。帰り來れる。近き頃。小て。珠は其性の奇異。加ゆし。時
あり。此物語りの時。居合。と。しハ。屋代。弘賢。終し。竹内。健雄。
佐藤。信淵。上。相。篤。興。など。其餘。小も。人あり。し。誰。小。有。居。合。
る。む。忘れ。り。此。よ。後。聞。る。人。を。いと。數。多。あり。居。合。
ある人。と。み。れ。甚。く。驚。は。る。已。按。布。小。今。昔。物。語。集。小。何。依。人。
方。違。ひ。小。下。京。邊。小。幼。兒。を。具。して。行。く。其。家。に。靈。あり。し。
を。彼。人。は。知。ざ。り。ゆ。幼。兒。の。枕。に。上。り。火。を。近。く。燈。して。傍。
小二三人。む。か。り。寝。て。乳。母。を。目。放。寤。して。兒。小。乳。を。ふ。く
免。て。居。る。依。り。夜。半。ば。り。ゆ。小。塗。竈。に。戸。を。細。め。不。開。けて。長。

五寸計ある男は装束しと依が馬小乗にて十人ばりて。枕
此布を渡りけし。乳母恐ろしと思ひながら傍に置
ぬる打またの米を扱うみて。投うけぬ小。此わける物ど
もさちと散りて失りて。打まさ此米ぶせよ血扱きけり。幼
兒の邊には必ず打またを置くことありと有也。中世より方
違といふ
事此ありしハ。皆人の知れるが如し。其中世よりハ。人の住捨
たる家乃所く小有し。其明家より方違ひ小行するあり
斯て其出する物を。冥と云へまど。寅吉が言は依まむ。此を
豆扱ま小ぞ有る。さて豆扱まぞ云ふ名義を。いりあらむ
と語り相々依は。屋代為しの言小。小き由あり豆といひ。ツ
を助辞にて。豆魔といふ義。ハ非じりと云れき。此を然も
有也。此事ハ。上小引と依大殿祭詞を講ずるぶと小。貞觀儀
式小。其祭れ時。殿内まよ御門小。米と酒を散る事。載

られと依文を共り引出る。しうぞ唯小散米の功を此み
述て。馬小乗て出と依物を。何物とも考へ及ばで在る依よ。
此時始免て。豆扱まと云ふ名を知り。散米はる事は。其妖を
消する術と知れるハ。實は寅吉が賜物小ぞ有ける。斯て後
小漢土
の源書ども。彼此と見し中小。然る小人の形せる妖物のい
と多く出で。怪を為する事実を。あまに見出さぬ。其が中よ
鼠婦ちふ蟲の。さる怪を為する事も。ありき。此ハ所狭く
煩をしられむ。其事ともハ。仙境異聞に集め記して。此より出
さ。ま。紫式部日記小。皇子御誕生後。うすもわぬらせ給
ひて。御らむに。若宮はし坐せむ。うちほきし。れ。志依云
云。依と源少將雅通など。うちまたをあげの。し。り。打
ふ。ち。む。と。争。ひ。さ。か。く。云。く。依と源氏物語横笛巻よ。いと
よく肥て。つ。ぶ。く。と。わ。う。し。か。あ。る。む。祢。を。あ。け。て。乳。あ。ど
く。免。給。ふ。ち。出。も。い。や。う。扱。く。し。う。わ。を。は。る。君。あ。ま。む。白

くねるしげある小御乳をいとかはらうあるを心我やりてあぐさ免給ふ男君もよおねをいゝねあをよとけはしたる夢のあをまはきれぬほし云く是も豆おまの出来ざゆやう豫て拂ふ事と見えぬは右等小就て思ひ出る小我が本生れ祖母は九十歳餘小て終られぬ己が十八九歳の頃既小七十小近うゆしが嫂あど凡る幼兒を養ふ婦女ハ兒の枕上小精米を忘れを置けと云こぞ我常よ言れしは此故實をとて傳ふし小や有らむ然れば精米を女詞小打またと云ふも今昔物語の事と合せて考ふる小妖物を避る小打時より出さる語ありまこ此今昔此事實小よて古牙兒を育ちる婦女は寝る傍に米を

置さる事も詳小知られて最も感とた事ありかし古道を人これ兒を生さむらハ産屋に散米するよと胞衣を藏むる土器に精米を入ゆ事まを兒を育ちる婦女の枕上小米を置こと必を忘るはしき事小こそ下總人千本松恭壽云く我が郷の何とて小嬰兒の生れて僅小一月ふと月計りよていま物心も有らぬが時として甚く色立ると限はあく笑ふ事あり然るを俚諺にえあがあやまると云て其状もれは指ぐらゆやう小ていと異し此は何れ事とも心おらで在つるをいま師の講説を承りて思ひ得侍りぬ然るハえあを胞衣あやけを其胞衣よ成るとる豆おまが宵し笑はあむるて其後了ハ必病み煩ひ虫あとし生ゆるよと有ものあり然有む時よをこれ精米もて拂祛き事と心得侍り然と云り此を實小然るべし總じて古道の學問をかくは事はで小深く心を用ひて其實地の道理を探究めて偶小然る事ありと母怖ゆよと無く惑ふこぞれく退散せしむる我倭心は鎮すと云ふ然

とば常小謂ゆる奇談の實事を記せる籍をも讀味ひて、其
實徵を明さむ事も、ゆゑ古學に肝要あり、其は亦る學問の
魂の御柱なき人は、偶に亦る事小出會ふ時を、大小惑いて、
彼謂ゆる戸牖の錯ちを動くも愕然して、夜目れいひ、
き伊豆志伎こそ有めるを、魂の柱の立たる人は、ま於斯
れ如き奇しれた天地に問小居て、神祇に妙なる依理を辨へて、
世小は様々の水さを爲は妖魅のある事も、常小知りて在
る故に、怪き事れ有りと聞ても驚るに、譬へた某所小居る
まべ出とて、見越し入道出とめと噂ありとも、然る化物も
有る事ぞと、知りて在れた驚くこそ無く、驚るゆ故に惑は

されま、是を彼兵書小謂ゆる、彼を知り己を知と、たハ、百度
困るまき所、然る小俗の儒者らが、如く心狭く、此天地を
と覚えたり、云ふ、大に奇異き中小居て、己の身の大き小怪しれた物な
依事小も心放り、玉鉾百首小奇志き、非じと云ふを、世
れ中の奇しき知らぬ癡心りも、と詠まよ依如く、世に怪き
事とては無なるを、奇しと思ふを惑ふ、狐いうて人を化さ
む、豈妖物幽霊れと云ふ物有らむや、邪と言ふ徒を、適に怪
志き事、我見てハ、膽を消し、或は化されも爲るれ也、川柳点
口吟みよ、化物の咄し、儒者ハ、放ちたりと、云、依も、其見
を高しと賛せる句、小非、その痴心を笑へ、依句あり、心を
放けて、味、其は古く晉書に見え、阮瞻と云じ

儒者のいぞ高識博覽の聞え有しが鬼神妖怪ふど云ふは。ふた事ぞとて無鬼論と云書を作れる小。或時外よと一人來せて鬼神の有ふる義を論じけるよ。阮瞻をも然る大儒よし有れむ。遂小そ此來まる人を散く小論破して鬼神の無ゆる事小歸しとて。其時その來れる人甚く其辨を感じて。論は誠然も有はく聞ゆれども我はそ其鬼神あるハ見々ぞ云ひさま恐ろした形を現はし示せて睨み付と依小。阮瞻ハ不意小。然るにぞし哉受て。大は膽を冷し驚きて。其よと煩ひ付て。遂は死とる事何也。此を儒者の例に偏前の小理ヲ拘たり彼をも己をも知らず。故はかく依不覺ハ取まるれ也。さく小古學此意を

熟く得て。大倭魂を突堅免彼をも己はも知りて在るハ。假令目れ前小。さうまは。見越し入道おと出らむも。人れおらひを然る者よて。馬の放屁小母驚くおと此有おれむ。見馴れぬ物の。不意小出ては。少く悸動はる事有はじたよ。非はまども。元よと心れ修行殊ある故。腰の抜くる計の事。おく忽小靜はり反て。扱もおぬしハ失禮おがら希有れ依面れ也。然れどま扱初免て出會ふて。満足小思ふこを。お年ごろ和主ら如き物の。世よ有こと慥し心得て在る哉。元來おぬしハ。何処小住ふ者小て。今何の用あてり出來しぞ。次く小問祢ま欲しく思ふこを多りと立はごかりては。

人^ナ對^シ立^テ依^リ道^ヲ小^シ非^ズ。ま^カ下^ニ小^シ居^テ語^ルれ^ルあ^リど^シ論^シた^キて。豫^カて^モよく^モ知^ラむ^ト思^フる^ル幽^冥界^ノの^ホ。ほ^シと^シ彼^ラが^仲間^ノの^有趣^ヲを^シ。問^ヒ試^ミこ^トむ^シと^シ構^ヘむ^ハ。其^ノ出^ルと^シ依^リ化^ス物^モし^テ文^旨れ^ラむ^小を^大化^ス小^シ困^リて^逃去^ス。ほ^シと^シ然^ル問^ヒの^答も^ある^ハ。ほ^シと^シ程^ノの^化物^アら^ハ。其^ノい^と面^白き^化物^アり^{。隨}分^小馳^走して^幽冥^世界^ノ事^ヲを^問ふ^{。然}る^ハ。此^ノ頭^世よ^{。幽}冥^界此^ノ事^ヲを^知ら^むと^爲る^小を^古今^ノ籍^小記^シ傳^{ふる}事^迹を^見て^{。知}て^辨ふ^依事^アれ^バ迂^遠ある^を。然^ル幽^界此^ノ物^よ。直^ニよ^{。そ}此^ノ界^ノ事^ヲを^問て^むは^斯か^{。か}て^手近^キ事^ノ無^レむ^れ也^{。然}る^を甚^古く^漢土^ヲて^ハ。黃^帝が^白沢^{とい}ふ^異物^ヲ問^ひて^{。万}物^ノ情^ヲ達^シ。天^下鬼^神此^ノ事[。]

ま^カ其^ノ古^{より}精^氣物^ヲを^為し^{。遊}魂^變を^為る^者。凡^ソ万^一千^五百^二十^種の^事ヲ^聞る^を始^メ。彼^ノ國^ノ達^人と^シ。神^仙鬼^魁の^類ヲ^出會^シて^{。幽}界^ノ秘^説を^聞る^事も^{。今}計^ふる^{。違}あ^らむ^中。小^シも^{。梁}此^ノ陶^弘景^ガ真^誥を^見て^も知^べく^{。此}方^小も^{。然}る^もめ^し多^ク。其^ハ後^白河^天皇^住吉^大神^ノ真^似して^{。開}発^源大^夫と^稱れ^る物^{より}。天^狗界^ノ事^ヲを^聞し^{。召}さ^ま。羽^黒山^ノ山^伏雲^景が^愛宕^山此^ノ天^狗界^小。其^ノ世^此治^乱の^未來^ヲを^聞る^{。杯}を^思ふ^べし^{。斯}の^如き^皇國^ノ事^實。ま^カ今^計ふ^る小^シ堪^え。己^ヲや^く然^ル例^ヲを^思ひ^て。亦^モ神^小誘^テ。物^ヲ伴^ハ。ま^カて^{。幽}界^小至^レ。依^者も^{。出}會^シて^{。其}趣^ヲ探^ぬる^を。俗^ノ愚^昧なる^学者^らが^{。然}る^大志^ヲバ^得知^らぬ^{。余}茂^し。徒^ニ奇^談を^好む^と論^ヲ依^テ。穴^ヲを^うし^{。然}る^有れ^{。鬼}神^小横^道不^し。とは^言ふ^{。絶}て^{。妄}語^不し^{。とは}言^ひ難^し。其^ノ中^小不^正此^ノ鬼^魁。文^旨此^ノ鬼^神も^有。ほ^シと^シれ^む。然^レま^カ其^ノ言^ヲを^聞る^{。む}小^シは^{。我}が^加補^テ學^び得^{。依}。古^道學^此真^規格^ヲも^て。正^し。能^く。其^ノ信^ヲを^ほき^茂

信じ取りて。信をばしたを擇び捨るぞ。鬼神幽界此事蹟を
探ぬる。對問の眞訣ある。然れど此眞訣をも。父まゝ子小も
傳へ得ず。うらぬ。機變の心法小し有れば。行尸小等し。鈍
學者流の。得知る所小非ざる也。抑この大旨を知らむと
考ふ記せる趣を。よく讀味ひて。まぢ世に妖怪の出來とる
由來を知り。まゝ稲生物怪錄などをも見て。そ此妖怪の人
を化す由縁を辨へ。凡て妖物の状態を知得る時を。さ亦對
問の眞訣も。腹中小出來ぬべし。其やがて大條魂の固。是れ
柱に立よ
ぞ有る。

